



変容

れからも、娘たちの「学童保育制度」を確立するため  
に、横浜市や地域とのかかわりは、さらに続いてゆく  
ものとなるであろう。



## 変容

元町今昔

扇谷 義男

中区元町 横浜生まれ 詩人 62歳

私は横浜に生まれ、横浜で育ち、そして、未だに一度もここを離れたことがないので、いわば、生粋のハマッ子ということになるだろう。それだけに、とりわ



け横浜をいとおしむ気持ちはずよく、決して人後に落ちるものではない。私はいま、必ずしも懐古情緒にひたるつもりはないが、しかし、率直に言って、現在の横浜はあまり好きになれない。私は元町の生まれなので、特に往時の元町の姿を思い浮べるとまことに心寂しいこと一入（ひとしお）だ。

自分の住む町が繁栄してゆくのは、たいへん結構なことだし、また、そうなくてはならない。だが、それだけが遮二無二先行して、自然のうつくしい緑は容赦なく削りとられ、妙なホテルやけばけばしい店舗などが建ち並ぶ、この風致地区とはいったい何んだらう。昔の元町には、華やかさのなかにも落着いた独特のふんいきがあった——といったら笑われるかも知れない。

ある偉い坊さんが、「観光化した町並みを一気に変えることはできまいが、昔の静寂さを人々の心にとりもどしたい。それにはまず姿勢を正すことだ。どんな利潤になっても、それに狎（な）れてはならない。」

こんな風なことをいっていた。考えさせられる言葉だ。

### ある九月

外人墓地に添って石段をおりと静かな海のほとりへ出る

大きな夏

あなたはもう そこには居ない

ヨットは傷ついたまま

砂地に孤独な影を濃く横たえていた

いつか 肩先に一枚の枯葉が止まって

ひとりして歩くこの並木道

風は白々しく流れ

あたりは だんだん珈琲色になってくる

汽笛が鳴っている

ベンチに腰かけていても

時間は邪険にすすむので

まもなく 君たちはこの港を去るだらう

ホテルの窓では不器用な手つきで

ボーイが

せつせと青空を磨いている

フランス山は、いまの私にとって唯一のオアシスだ。着飾って、中味のがらんだ元町に背を向けて、また、ここへやってくる。脂肪太りの元町。それでも愚かな私は、どうしてもお前を忘れることができない。

## 丘の上の随想

江見 絹子

中区山手町 在住三年 画家 51歳

私は大抵朝の三時には仕事を始めている。起きるとすぐに庭に出て、冷い夜気を浴びながらむかいの丘を眺めることが多い。馬蹄形の丘に囲まれた谷間の灯

は、漆黒の海に漂う夜光虫の群を思わせる。空を仰いであるかなしかの星に目を凝らしているうちに、私には一日中の最も緊張した時間が訪れる。

アトリエにはいつて戸を閉ざすと、あらゆる外部から遮断され、私は私だけになり、やがてその私さえ意識から消えて、気が付くと八時になっている。調子づいて無心に仕事を進めていることもあれば、考え込んだまま四、五時間経つ事も多い。油まみれになって仕上げた絵のどこかが気に入らないで、ガサッとキャンパスから削り取ってしまうのも、大抵朝のこの時間である。開け放した窓から朝の新鮮な空気が流れ込み、室内のこもった熱気がすーっと消えていく時、再び私は陽の当たる丘を眺める。

私がこの丘にひかれて横浜に移り住んでから、もう二十余年になる。東京都美術館での行動展に出品したのをきっかけに上京した私は、勉強の場を東京に求め、それ以来故郷を離れている。

東京に暫く滞在していた頃の或日、足を延ばして横





浜に出てみた。終戦後五、六年の横浜駅周辺は建物らしい建物とてない、くすんだ灰色の街という印象が残っている。誰が今の西口の繁華街を想像しただろう。電車の終点であった桜木町駅に下り、何処をどう歩いたのか、後から思うと野毛のあたりから、他よりはずつとにぎやかな伊勢佐木町の通りをぬけ、尾上町に出たらしい。あたりのひっそりと侘しい町並を見て、今通ったあの通りが繁華街だったのかと、始めて気がついた。横浜の元町は、いちはやく復興に向かった神戸の元町のガラガラと光るジュラルミン街に比べてしつとりと落着いていた。ある独得の雰囲気が私の心を和ませてくれたことを覚えていた。元町の上にもんもんと木々におおわれたなだらかな丘がある。その丘のむこう側の南に面した土地に、それから暫く後に私は住むことになった。緑一面の連らなった、丘あり谷ありの横浜の地形がすっかり気に入って、陽が海から昇り、丘に沈むのを眺めながらの朝夕、あたりに何も無い草ぼうぼうの静かな土地が、私の格好の仕事場にな

った。

東京の中心からは近距離にあることも好都合であった。勉強も作品発表も東京中心の、正直いって東京の郊外にでも住んでいるつもりの中の当初何年間かが過ぎた。横浜に「ハマ展」という団体展があつて、そこにも出品しているうちに、私は次第に「横浜」を意識す

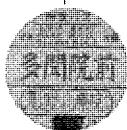
〈横浜の人たち〉

部屋数と畳数

住宅の 所有関係	1世帯あたりの平均居住部屋数	1人あたりの畳数
持家	4.3 室	6.1 畳
公営借家	2.7 "	4.1 "
民営借家	1.9 "	3.8 "
給与住宅	2.9 "	4.6 "
間借り	2.0 "	3.2 "
横浜市平均	3.15室	5.1 畳

(45年国勢調査)

横浜の1世帯あたり平均居住部屋数は3.15室、1人あたりの畳数は5.1畳。横浜の場合この数年、ともに横ばいの傾向で、全国平均の3.9室と6.1畳にくらべ、いずれも狭い。



るようになっていった。ひっそりと暮らしたい意向とは裏腹に。土地の画家と話す機会もふえ、県下の女流美術家協会なるものを創立しなければならぬ羽目にも落入って、以来十年余り、私の横浜とのおつき合いも、ぐんと幅を拡げ、いつの間にか私は横浜人になってしまっていた。

私がこの土地に移った頃、横浜に住む画家の多くが、実は私もそうであったが——その活躍を東京中心におき、横浜ではおつき合い程度という風であった。

そのような横浜画壇が他の地方都市の画壇に比べ、まとまりの点において一歩も二歩もおくれをとるに不思議はない。東京が近すぎる、という理由の他に、発表の場が満足でないことも致命傷であったろうか。過去の「ハマ展」でも毎年のように会場を転々と変え、第一会場は〇〇デパートで、第二会場は〇〇書店で……といったコマギレ発表の年もあったと記憶している。画家の育つ最も大切な条件の一つである発表の場が貧弱であったのは、戦後横浜市の復興がおくっていたた

〈横浜の人たち〉

民営借家と住宅難世帯

民間アパート	1世帯あたりの部屋数	1人あたりの畳数	1畳あたりの家賃
神奈川県 神奈川 神ノ木町 (N=102)	1.7室	2.9畳	1,550円
南区井土ヶ谷 (N=92)	1.8〃	3.6〃	1,620円

(48年8月 都市研「民間アパート調査」)

横浜の民営借家住まいは全世帯の35%。民営借家の平均居住部屋数は1.9室、1人あたり畳数は3.8畳で、民間アパートになるとさらに狭い。また、狭小過密などの住宅難世帯は43年住宅統計調査の結果から、市内では約15万世帯と推計される。この大部分を占めるのが民営借家人で、住宅難世帯の割合は、低所得者層に多くなっている。

めでもあろう。

時代が進み、市がめざましい発展の途にある時も、事情はさほど好転しないようにみえた。その当時、市民ギャラリーができたことが横浜画壇にとって大変な救いであったが、美術館建設を、という声が政治の場に届くのに長年を要したり、美術館が建つかとひそか



に喜んでいたら博物館であったり、など、えかきの間で話題になっていたあの頃、想像もできなかったような事柄が、今起こりつつある。

新しい市民ギャラリーが建って、今年（昭和四十九年）七月に開館した。そして今建設中の県民ホールとかいう大きな会場が五十年度に開館するそうである。ようやくにして生きた美術館が、という実感と共に、一ときにこう華やくと戸惑わんばかりである。設備のいきとどいた会場を与えられた横浜の画家が、実力を発揮するのはこの時であろう。

日本の近代洋画がはじまったのは、実は横浜からである。明治の初期に横浜に居住していたワグマンに高橋由一が師事した事からはじまるのだが、もし仮に、当時の為政者が洋画研究所でも設置していたら横浜はどうなっていただろう。美術の殿堂横浜市と呼ばれる今日があったかも知れぬ、などと考え、よこはまにはそのような空想を抱かせる何ものかがある、と私は思っている。

## 私とよこはま

郷 静子

磯子区森五丁目 横浜生まれ 小説家 45歳

私の祖母は、日露戦争の頃、千葉県山村から横浜へお嫁にきた。きたところは、今の西区高島町で、きれいな海がすぐそばにあり、あざりをとってきては味噌汁の実にしたという。祖父は若死したが、祖母は今も健在である。

私が小学校へ上る少し前くらいに、横浜駅のとなり神奈川郵便局が出来た。工事中は大きな砂山がいくつも積まれて、危いから行ってはいけないといわれていたのに、小さなバケツとシャベルを持って、度々その砂山へ遊びに行った。郵便局が出来ると、今度は赤い大きい郵便車が珍しくて、門のところになつては、出入りする車をいつまでも見ていた。その危いことは砂山の比ではなかったので、祖母もいっしょにな

って郵便車見物につきあってくれた。

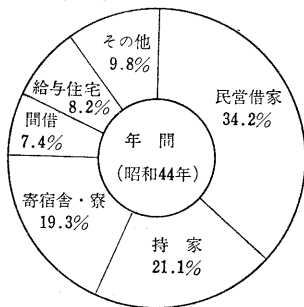
小学校は平沼小学校に通った。私の母も、平沼小学校を卒業している。先日、平沼町にある「よこはま労働」の事務局に会費を納めに行ったら、ちょうど春休みで近所の子どもたちが遊びに来ており、ぼくたちも平沼小学校だよ、といった。その中の一人は、ぼくのお父さんも、ぼくのおじいちゃんも平沼小学校だよ、といった。私は、あのまま高島町に住んでいれば、私の子どもたちも平沼小学校へ上り、この子と同じように、親子三代通うことになったのだな、と思った。

ふつう大きな駅の近くは賑やかなものであるが、どういうわけか横浜駅の周辺は、当時あまり賑やかではなかった。とくに、今では賑やかななどというものはばかられるほどの凄い発展ぶりの西口は、人家もまばらで、砂利置場、石炭置場、貯木場と並び、更に広い空地が続いていた。空地には春になるとつくしが顔を出し、おかげで私は横浜駅のすぐ近くで暮しながら、春ごとにつくしの酢味噌和えを食べて育ったのである。

現在、私は磯子区屏風浦に住んでいるが、屏風浦には小学校の頃、臨海学校で海水浴に通ったことがある。それから潮干狩にも度々来た。終戦の年の春も祖母と二人で来て、潮の引いた沖の方まで出てすぐに警報がなり、あわてて岸まで駆け戻った。空襲の被害はなかったが、解除になるのが遅れて、退避している間

〈横浜の人たち〉

転入者に増える借家層



(総務局「昭和44年横浜市移動人口実態調査」)

市内の住宅事情は、昭和40年以降急激に悪くなり、この時期からの転入者で持家に住めるのは約2割で、民間アパートなど借家住まいの割合が増えている。



に潮が満ち始め、いくらも収穫はなかった。その頃は、潮干狩などといっても遊びよりは食糧獲得の気持がつよかったので、がっかりして帰ったものだ。

私が屏風浦に移り住んだのは十年くらい前のことだが、その頃には、すでに屏風浦に海はなかった。埋立地の何もない広々とした地面に、乾いた貝殻が骨のかげらのように白く散らばっていたのを、今でも憶えている。

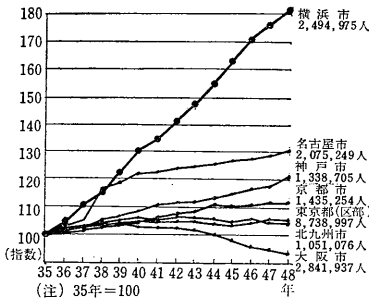
同じ場所に、今は、工場とマンションの高層ビルが立ち並んでいる。磯子駅の近くを夜、通るときなど、本当にここがかつての海の上なのだろうか、と感慨無量といった気持ちになってしまう。

大事な海を埋めて作った土地がいろいろと役立っているのはいいことだと思うけれど、人口の急増に伴って、子どもたちの学校がはち切れそうなのは困ったことである。屏風浦小学校では分校を建てるように運動しているけれども、その場所がないというのがきびしい現実のようである。埋立地の一部を、学校建設用地

として残しておくことは出来なかったものか、などと、今更いったところで追いつかない。

素人考えだけでも、たとえばこんなのはどうであろうか。住宅地から遠く離れたところにはまだ土地があるだろうから、そこに学校を建てる。子どもたちはスクール・バスで通う。といつても、校門にバスを横

〈横浜の人たち〉  
激増する人口



(大都市比較統計および各市統計書による)

横浜の人口増加率は7大都市のなかでも際立って高く、この10年間に横須賀・相模原・鎌倉の3市をあわせた人口に等しい約90万人が増えた。



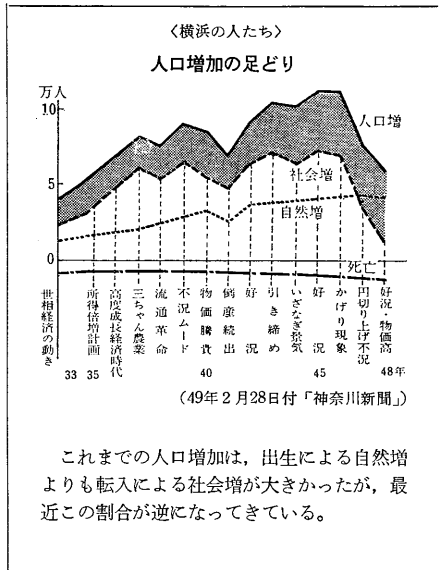


づけするといふのではなくて、子どもの年齢と体力に  
 応じて、一キロなり二キロなり手前でバスを降りて、  
 あとは学校まで歩く。当然通学時間がよいかかる  
 から、学習時間の長くなる高学年には向かないかもし  
 れない。しかし、幼稚園時代はスクール・バス通園を  
 する子ども多いのだから、低学年の子どもたちには、案  
 外抵抗がないのではないだろうか。土地がないための  
 サンドイッチ学校は、どう考えてもよくないように思  
 われてならない。

父は、明治生れの老人によくあるように、「昔はよ  
 かった派」である。市長といえは「平沼さん」で、飛  
 鳥田さんには偏見を抱いている。飛鳥田市政を評して  
 いわく、「政治家が女子どものご機嫌とりをやっている  
 ようでは、その土地は発展しない」。

若い頃の私は、そういう父とはなばなしくわたり合  
 ったものだが、今はお互いに年をとったので、あまり  
 老人には逆わないことにしている。むしろ、父の意見  
 に賛同しているわけではない。父に限らず、世の男性

たちには、女子どもの犠牲の上に、壮大な夢を描きた  
 がる悪いくせがあるように思われて、油断がならな  
 い。子づれ女の私は、政治がそういう方向に進まない  
 ように、よくよく注意しなければ、と思っっている。





私の横浜

## 横浜と私

山村 聰

中区竹之丸 在住一五年 俳優 62歳

横浜は、学生時代、私の憧れの町であった。円タクといわれたタクシーの洪水時代には、交渉次第で、随分安く、東京から遊びに来られたものである。帰りには、六郷の大橋まで、横浜のタクシーに乗り、そこで、客待ちしている東京のタクシーに乗り換えると、更に安く帰ることが出来た。

横浜には、たのしみが三つあった。ひとつは、支那街である。露路の奥に、汚くて安い名代の美味い料理があり、食べ終って町へ出る頃には、まるで妊産婦のように腹をつき出し、そろりそろりと、口を開けて歩かねばならぬほど、喉（のど）もとまで貪り食ったものである。

もうひとつは、元町である。いまの商店街からは全

く想像もつかない、静かな、寂れた通りであったが、外人の姿の多いことが、当時としては、異国情緒をそそった。元町には、古道具店が沢山あり、おそらく、外人が日本引き揚げの際に売ったものと思われる西洋風の家財や、台所用具などが、ぎっしりと積まれている、砂糖壺とか、コーヒーカーップとか、古ぼけた下手（げて）ものは、私のような貧乏学生にも、ひょっとして、掘出せたものである。現在、私が出没するところといえば、殆ど元町界限であるが、あの区域だけは、常に自動車の通行を禁止し、外国のように、往來に椅子や机を並べ、花を植え、音楽を鳴らせたいと思う。一時、元町発展のイメージとして、両側の軒を揃え、両側の二階にも通路をつくり、ところどころを跨（こ）道橋で結ぶ構想をきいて、胸を躍らせたことがあるが、どうやら沙汰やみとなつたらしく、がっかりしている。日本中どこへ行つても、同じ形の町作りばかりが目につくとき、同じ近代化にしても、思い切つた、獨創性を發揮してもらいたいと思う。ヨーロッパ

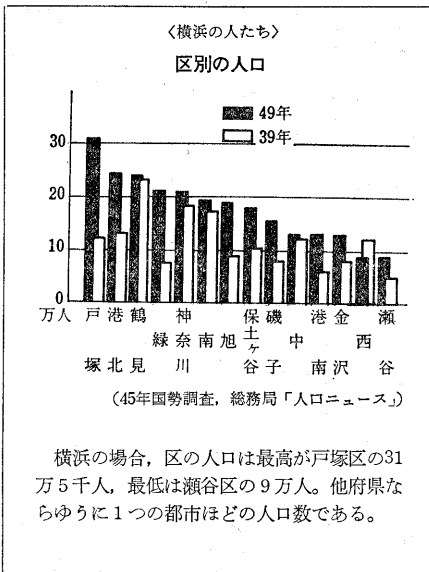


の町を見ても、旧市街は、昔のままの地方色を、そのまま生かして、いまだに、独自の雰囲気醸し出しているのは、まことに羨ましい。

もうひとつは、釣りである。その頃は、海もまだ美しく、港内の近場でも新鮮な魚が釣れた。もっとも魅力のあったのは、防波堤の、黒鯛の夜釣りである。たもあみ、餌、道具箱など、釣道具一式を、弁慶の七ツ道具よろしく身につけて、堤防の上をあちこちと釣り歩く風俗は、いかにもシックであった。はげも、ふっこも、極く手軽に釣れた。

若い頃の憧れが、いつまでも尾を引いていたのであろう。ふとしたことから、長年住みなれた東京を払って横浜へ移ってから、早くも十五年近くになる。しかし、来てみて驚いたのは、公害のひどさであった。戦後、進駐軍の兵士の間に流行したこと、横浜喘息（ぜんそく）などと呼ばれて、一種の風土病のように思われたらしいが、私なども忽ち、喘息のような慢性症状にとりつかれた。私は、京浜地区の工業のもたら

す汚染が原因であると思っていたが、当時は、まだ、公害という言葉もあまり行き渡ってはいなかった。近頃、やかましく叫ばれるに至ったが、港内はおろか、港外の魚も、今は、汚染がひどく、とても食用には供せないまでに進行してしまっただ。今は埋立てられてしまった、間門海岸の、美しい海水浴場などは、遠い大





昔の夢である。

市内を縦横に走るクリーク（川・運河）の汚染もひどい。夏の干潮時など、悪臭が胸につかえるほどに沸き上ってくる。あるとき、ある商店街のPR誌に原稿を頼まれ、横浜の宣伝が、いつまでたっても、「港の見える丘公園」のひとつ覚えはあまりにも情けない。どうして市民は、海水の流入口に浄水装置を取りつけ、横浜を美しい水の都にするための運動ぐらい出来ないのかと、悪たれ口を叩いて、美事、没になってしまったことがある。

道路の悪いことも、移住してきたときの、大きな驚きであった。以来、工事に次ぐ工事で、大分良くなってきたが、それにしても、あと何年、この長い不便を我慢すれば、美しい街になるというのであろう。私たちは、私たちの町のために、私たちの美しい生活を夢みて、その点にのみ、願いをこめて、我慢をしているのである。

為政者は、もっとしつこく、繰り返かえして計画を説

明し、十二分に、市民の協力を得なくてはなるまい。革新市長にかける私たちの期待は大きい。政治というものには、ひろく、私たちの生活を守ってくれるものにかがいないからである。

私も、今は、横浜の人間として、余生を横浜に埋めるつもりである。大都会東京の隣にしては、あまりにも、地方の小都会風な印象は、県や市が貧乏であるという説明だけでは、納得の行かない点もある。公共機関の窓口などの、市民に接する態度にも、しばしばそれが見受けられるのは、いかにも残念である。小都会ほど、公共機関が、市民の上に、権力的な雰囲気ですりやすすいものである。

## レンズの見たヨコハマ

常盤とよ子

中区大平町 横浜生まれ 写真家 44歳

昭和三十年、東京をはじめ、日本中のほとんどの町



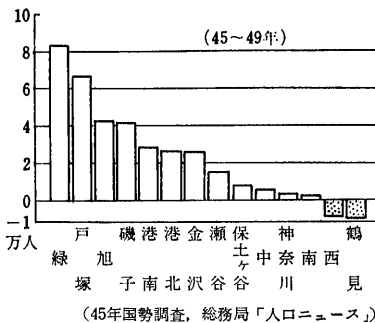
が、ようやく戦争の影から抜け出した頃ですが、横浜にはまだ敗戦の名残りが色濃くただよっていました。現在の市役所と県庁の間あたりのいわゆる関内一帯は、雑草がぼうぼうと生い茂り、焼けビルが煤けたコンクリートの壁をさらして、その壁にはペンキで横文字が書きなぐられていたり、一種異様な荒涼たる風景を見せていました。接取地が多いために復興もままならないその風景を、自嘲を交えたニューモアで、関内牧場とハマッ子たちは呼んでいました。

伊勢佐木町には、前こごみで重いまなざしの日本人を尻目に、はち切れんばかりのヒップを、ピタリしたズボンにつつんだGIがまだまだ多く、そのGIに寄りそって、どぎつい化粧の女性たちがいました。また、いわゆる川向うと呼ばれた遊廓一帯には、たそがれと共に客を引く女性たちの姿が見られました。こうした世相の中で、世間から白眼視されている女性たちの中に、わたしは強烈なバイタリティーを見たのです。焼けあとの煤けたビルに、そのビルの亀裂に芽ぶ

いた雑草に感じるような美しさを、そんな形でけんめいに生きようとする女性たちにも感じたのです。それが、わたしのカメラとのふれあいであり、横浜とのふれあいだったのです。きびしい環境の中で、必死に生きていく人間の美しさ、その哀しさをとらえてみたい、それを映像としてつかみとることができれば、横

### 〈横派の人たち〉

#### 45年以降の人口増減数



ここ数年の区別人口は、緑・戸塚・旭などの周辺区で増え、都心部の区で横ばいか減少をするいわゆるドーナツ化現象がみられる。



私の横浜

浜の歴史のひとつまを綴ることができるのではない  
か、さらに、わたし自身が生きているあかしにもなる  
のではないか、そんな気負いとその頃の若さが、わた  
しを写真への道へ引きずり込んだような気がします。

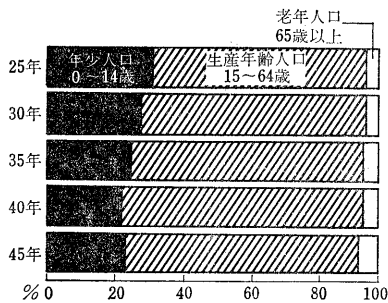
そして、以来、キャバレーで働く女性たち、女子プ  
ロレスのショー、厚化粧の老妓、チンドン屋さん、赤  
線地帯の夜の女たちなど、いわば世間の裏街道で必死  
に生き続ける女性たちにカメラを向けてきました。昭  
和三十二年、これらの作品を集めて「働く女性」とい  
う写真展を開いて、わたしなりにひとつの区切りをつ  
けてみました。しかし、当然のことですが、それで仕  
事が終わるわけはありません。時が流れ、世相がかわ  
ったとしても、その中で生き続け、働き続ける女性が  
いなくなることはないのですから。

わたしにとって、もうひとつの大切な横浜とのかか  
わりあいは、陳腐なようですが、やはり港です。港に  
は、旅への誘いといったロマンだけではなく、凝縮  
された人生のドラマがあります。出会いと別れ、そこ

にはひとりひとりちがった、その人たちの歴史の頂点  
があらわれます。写真というものが、時の流れにさか  
らって、ある一瞬だけを固定しなければならぬ作業  
だけに、しかも固定された映像の中に過去と未来に橋  
をかけるドラマがなければならぬだけに、港での出  
会いと別れは、何にもましたテーマになりました。し

〈横浜の人たち〉

生産年齢と年少・老年人口



(各年度の国勢調査)

全国割合にくらべて、生産年齢人口の割合  
が多く、年少・老年人口が少ない。しかし、  
昭和40年以降は後者の割合が増え、前者が減  
っている。

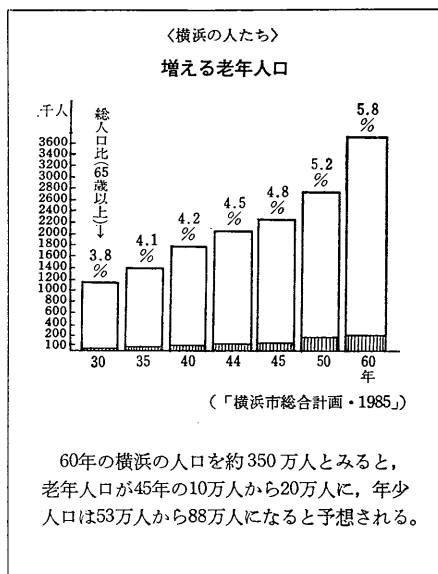


かもその背景は、朝鮮動乱時代の軍艦であったり、まっ白なカンボージュ号であったり、移住者に乗せて南米へ向うアルゼンチナ丸であったりします。港をとりまく山下公園一帯も、進駐軍の宿舎が立ち並び、金網越しにでなければ港も見えなかった時代から、水の女神の彫像と噴水がかざられる時代になり、修学旅行のバスの列が連らなる時代になりました。海岸通りのいちよう並木だけが、変らぬ緑を見せてくれます。

ある町とのふれあいを振り返るとか、またその町で長く仕事を続けているとかすると、どうしてもセンチメンタルな追憶にとらわれてしまいがちです。しかしわたしは、好きな横浜で、その都市としての変容にひたりながら、仕事を続けていきたいと思えます。

新しい横浜のエネルギーを示すような風景がつきつきと作られています。たとえば横浜駅西口、たとえば大規模な団地、高速道路、地下鉄。そして、かつて赤線地帯を区切っていた川もなくなり、そこには公園が作られようとしています。こうした変容の中で生き

続け、暮らし続ける人たちのいのちを撮り続けてみたいのです。そして、その中で学び育っていく子どもたちを追いかけてみたいのです。親の代から横浜生まれという人たちは、もうずいぶん少なくなっているに違いありません。しかし、ここで生まれ、育っていく子どもたちにとっては、横浜こそがふるさとなのです。





子どもたちのために、ほんとうにすばらしいふるさととして、どうしたらこの町を作り変えていくことができるのか、また、その中で、子どもたちがどんなエネルギーをつかみとり、未来へつなげていくことができののか、それを見つめ、とらえていくことを、これらの仕事のひとつとしてみたいと考えています。

## 横浜と私と故郷

朴 龍 喆

鶴見区駒岡町 在住三三年 飲食業 45歳

人は誰でも、故郷といえは限りもなく想いこがれるものである。日本在住の朝鮮人にとって、故郷はそこそ痛いほどの追憶でなつかしみ涙ぐむ、遙けき土地である。

私の故郷は慶尚北道の義城（辰韓時代の召文）である。太白山脈の水を集め、金海（きむへ）平野から朝鮮南海（なむへ）に注ぐ洛東江の上流地方にあたる。

海を知らない、山国の貧しい部落であるが、三歳の時父母とともに日本に渡った私にはさだかな記憶とてない。

一九三〇年代初期渡来者の大部分がそうであったように、日本帝国の植民地収奪による生活苦を逃れて、日本に幻想を求めたのである。だが、日本は「乳と蜜のながるるカナン之地」ではなく、迫害と抑圧の鞭に追われて、私たちはこの弓状列島を南は九州から北は山形に至るまで流れ歩いたのである。小学校だけでも十二回、転校をかさねたといえ、ほぼ想像していただけのだろう。

私と横浜の出合いは、太平洋戦争が始まった頃である。三重県の桑名から戸塚に移ったのであるが、横浜のイメージは、少年の私にとってそれこそロマンチックな港、遠い異国への船出の港——いかなれば少年期に抱く航海の夢が凝集した煌（き）らびやかな港であった。ところが戸塚は山の中なのでとまどったが、ともあれ港を訪ねたのである。





想像の中での白い船体の豪華な旅客船や、五色テープの華やいだ別れのシーンや、青い目の人形のイメー  
ジはさがすべくもなかった。高島埠頭へ行進する英国  
兵捕虜の列と、黒い輸送船が、少年の私に戦争という  
ものを初めて実感させてくれた。だが、伊勢佐木町通  
りの賑いや、県庁通りの静かなたはずまいなど、横浜  
が私にそれまでの土地にはなかった異質なものの——視  
野のひろがりを与えたことも事実である。

私にとって最も強烈な印象は、何といっても一九四  
五年五月二十九日の横浜爆撃である。五月の爽やかな  
空の色に誘われて、裏山に寝ころんで本を読んでいる  
と、頭上をB 29の編隊が白昼堂々と滑ってゆく。小さ  
い十字架のような機体からゴマ粒のように撒かれる焼  
夷弾。私は二六〇機ほどまで数えたが、五〇〇機はあ  
ったと思う。しばらくして東北方のコバルト色の空  
を、真黒な入道雲がもくもく湧きあがっておぞましく  
染めあげていった。その下での阿鼻（あび）叫喚の地  
獄図を想像して私は慄然としたものである。その焼跡

を歩いた印象は語るまい。

私は朝鮮解放のよろこびを横浜で迎えたのである。  
一九七四年、その後の横浜の変容に私は目をみはる  
ばかりである。かつての田園、戸塚は人家と工場の密  
集地帯となり、ペンペン草の生えていた西口は百メー  
トルを越す高層ビルを始め流動人口日本一を誇る繁華  
街となった。港にはマリントワーが立ち、少年時代の  
私がイメージした華やかでエキゾチックな雰囲気がか  
もし出され、朝鮮の貨客船マンギョンボン号が時々入  
港して市民の歓迎を受けている。

私にとって嬉しいのは、神奈川県沢渡の丘に五階建  
ての壮大な姿を見せる神奈川朝鮮学園であり、チマ、  
チョゴリの民族衣裳をなびかせて登・下校する朝鮮人  
学生の姿である。横浜という都市は外国人が多いせい  
か、市民たちも何の違和感も持たないし、しっくりと  
とけこんでいる。国際都市の貫録でもあろうか。

私はこの十年、市民ギャラリーで毎年ひらかれる  
「日・朝友好展」を楽しく見せてもらっている。数百



点にのぼる美術・詩歌・生花の作品には、両国の友好・親善のまごころがこもっていて、見ていてすがすがしい喜びをおぼえる。他の都市にはない特徴のひとつだと思ふ。

平和であることの貴重さ、そこに友好の花がひろき、国際連帯の輪がひろがる。今年（昭和四十九年）のアジア卓球大会の感動的な成果が、何よりも強くそのことを実証した。人々の心の輪をみごとにつないだことの意義は大きいし、横浜だからこそできたといつても過言ではない。この横浜は、私にとって第二の故郷のようなものである。三十年前、孤独にザキ（伊勢佐木町）をさまよった私が、今では温かい友情と連帯の輪のなかを歩いている。

それにしても、私は南朝鮮の故郷を思うと胸のはりさけるような怒りをおぼえる。そこでは、キーセン觀光という汚辱が外貨獲得の美名を着ており、また愛国者たちが牢獄に閉じこめられ、空も、大地も、人の心も凍りついている。

歴史が位置づけた横浜という国際都市、そして二百五十万市民が、私たち朝鮮人の祖国統一への意志と希いにこたえてくれることを私はかたく信じている。そして私は、大棧橋から大勢の日本の友人に五彩のテープで送られながら故郷へ——統一された故郷へと向うその日のために、自分のすべてを捧げるつもりである。

### 愛国華僑の「住民意識」

鄭 青 栄

中区山下町 在住二六年 横浜華僑聯誼會副會長 31歳

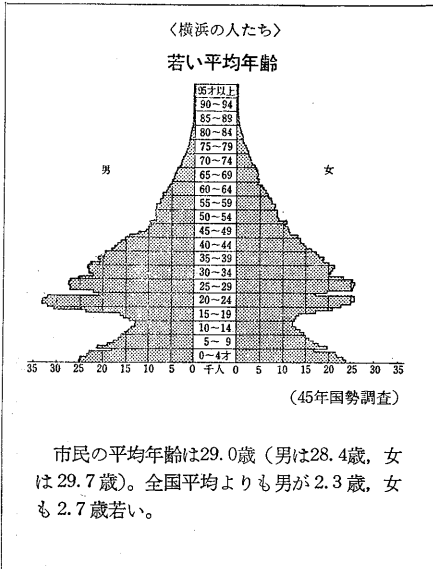
私は、横浜には五歳のときに引越して来ました。「浜っ子」の仲間入りをしたわけです。横浜には五千名以上の華僑が居住していますが、私のようないわゆる「華僑第二世」は横浜に数千名おります。横浜の華僑は百年以上の歴史があります。華僑の職業は、昔から「三種の刃物」といわれ、「庖丁」（飲食業）、「鉄

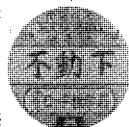


み」(洋服仕立業及び美容業)が主で、戦後は「狭み」が次第にさびれ、「庖丁」だけが中華街を中心に年々発展をとげてきました。中華料理は大変日本人の人から好まれ、中華街の場合、日本人の好みにあうように本場の味をアレンジしているようです。故国を離れて横浜へ渡ってきた老華僑も、近年は高齢のため「第二世」に店を任せるところが増えています。

私が小学校三年のとき、戦後復興期にあった横浜、その一角にある山下町——中国人と日本人が雑居していたこのバイタリティ溢れる異色の町で、「華僑学校事件」が持ち上がりました。当時の華僑の社会は、いわゆる「戦後処理」で日本に駐在していた国民党代表部の「監督下」におかれていましたが、母国においては中華人民共和国政府がすでに成立四年目を迎え、米軍第七艦隊が台湾海峡へ侵駐して、アジアは「冷戦」の局面に入っております。この複雑な情勢は、華僑社会にも深く影を落していました。すでに台湾へ落ちのびていた国民党の駐日代表部の腐敗した「施政」に

不満をもつこの華僑学校の教師と生徒たちは、大多数の父兄とともに反抗に立ち上り「教育干渉反対」の闘争は、またたく間にひろがってゆきました。この闘争を通じて多くの華僑は国民党の「監督下」から離反し、真の祖国——中華人民共和国への支持へ公然と踏み切っていきました。横浜の華僑学校の「不穏な動





向」に驚いた国民党代表部は、ついにかれの寄港中の海兵隊を派遣して鎮圧に乗り出しましたが、愛国華僑は少しも屈服するところがなく、とうとうその年の八月一日に日本の武装警備隊を導入し、学園は一種の軍事封鎖のもとにおかれ、圧倒的多数の愛国華僑は学園から追い出されてしまいました。

あれからすでに二十数年、学園を追われた愛国華僑はいばらの道を歩んできませんでした。民間で提供してくれた住宅を寺子屋がわりに使った分散授業、大衆募金による「山手臨時校舎」の建設などを通じて愛国と友好の教育を振興するかたわら、国民党駐横浜「総領事館」の「パスポート」を武器とした「踏み絵」式の迫害、台湾に身内がいる同胞への締めつけ、官憲のいやがらせを受けるなど、愛国華僑として「みさお」を守り通すことは並大抵なことではありませんでした。このような困難な状態の中で、私たちは日中友好をねがう横浜の官民各界の友人がたから、貴重なご理解とご援助を頂いたことを決して忘れることはできません。

この学校事件は、横浜の華僑の意識の深層の中に、いやおうなしに消しがたいツメあとを刻み込みました。しかしながら、このような人の世の不条理はついに二十二年後の今日、是正と解決の方向にむかって大きく歩み出したことは、私達愛国華僑の最も欣快（きんかい）とするところであり、大きな慰めであります。中日両国の国交はすでに回復され、横浜市は上海市と友好都市のちぎりを結びました。私たち愛国華僑は、日本の友人の皆さんとともに八億中日両国人民の明るい友好の前途を心から祝福し、歓呼の声をあげずにはおられません。

いま横浜の華僑界は、情勢の好転と発展に助けられて、一つの新しい胎動が始まっています。それは、「どうしたら、真の中日友好をこの横浜で大樹のように発展させるか」ということです。八億中日両国人民が子々孫々に至るまで仲良く暮らしてゆくことは、アジアの平和のため、ひいては世界の平和のために大きな意味をもっており、両国人民の共通の利益にかなっ



ています。これは平凡なことのようで、両国の過去の一時期の不幸な歴史を考えると、実は非凡な事業だと思えます。

過日、横浜で「第二回アジア卓球選手権大会」が開催されたとき、横浜の愛国華僑は、聯誼会を中心に「台湾系」と見られていた多くの華僑団体をも含めて一致協力して「華僑協力会」を結成し微力ではありましたが、大会成功のためにお手伝いさせてもらいました。これはいままでの華僑界になかった事で、華僑の愛国大団結、大統一は一つの前進をかちとり、その基礎の上で、中日友好事業への強い志向を實際行動で示しました。

私達は長かった学校事件の最終的な解決も早期に達成できると確信しております。私達は全力をあげて、そのための努力をつづけたいと思っております。また同時に横浜の各界の友人の皆さんがたの一層のご理解をいただきたいと念願しております。

私達は意識の面で「愛国主義と国際主義とを正しく

結合させる」という観点を確立し、その中で横浜市民としての側面をもっと自覚したいと考えます。私達は中日友好のかけ橋の朽ちることのないねじ釘となるよう、また横浜の進歩、発展、繁栄のため、市民の皆さまとともに応分の努力をしてまいりたいと思えます。

